

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	大 坂 遊
学位授与の要件	学位規則第4条第①・2項該当		
<p>論 文 題 目</p> <p>大学生の社会科観・授業構成力の形成過程とその要因 — 中等社会科教員養成カリキュラムに関する事例研究 —</p>			
<p>論文審査担当者</p> <p>主 査 教授 草 原 和 博</p> <p>審査委員 教授 池 野 範 男</p> <p>審査委員 教授 木 村 博 一</p> <p>審査委員 教授 小 原 友 行</p> <p>審査委員 教授 棚 橋 健 治</p> <p>審査委員 准教授 永 田 忠 道</p>			
<p>〔論文審査の要旨〕</p> <p>本論文は、我が国において社会科教育学を基盤とした中等社会科教員養成カリキュラムを実施する X 大学に注目し、そこで学ぶ社会科教員志望学生の社会科観ならびに授業構成力の形成過程を明らかにすることで、教員養成カリキュラムの改善の方向性を提案することを目的とする。</p> <p>本論文は、以下の5つの章で構成されている。</p> <p>序章では、社会科教員養成の研究史を概観した。具体的には、実践を基盤にした school based の教員養成の動向、washed out と呼ばれる入職後に大学での教員養成の学びが洗い流されている実態、さらには大学を拠点にして社会科指導に関する rationale development を担う必要性とそれをめぐる研究動向を論じた。</p> <p>第1章では、3つの教員養成カリキュラムの比較から明らかになる X 大学の特質を述べた。具体的には、教科教育を重視した X 大学、教育実践を重視した Y 大学、ならびに教科専門を重視した Z 大学を取り上げ、各大学の教員養成の理念と体系を詳述するとともに、質問紙調査を通して明らかになる各大学の教員志望学生が習得した資質・能力を明らかにした。また、社会科観の構築と授業構成力の向上として特色づけられる X 大学の社会科教員志望学生の学びの特質を指摘した。</p> <p>第2章では、X 大学における意図されたカリキュラムと実施されたカリキュラムの構造を論じた。具体的には、1年次の「中・高等学校教育実習入門」、2年次の「社会科教育論」、3年次の「社会系（地理歴史）教科指導法」、4年次の「教職実践演習（中・高）」に注目し、各科目の目標とシラバスならびに指導過程の分析を試みた。その結果、①授業構成力を支える社会科観の理論化、②社会科観を実現する授業構成力の具体化、③自己に内在する授業構成力の省察は体系的に指導されている一方で、④自己に内在する社会科観の表出については、十分に支援されていないことが明らかとなった。</p> <p>第3章では、X 大学における達成されたカリキュラムの状況を論じた。本章では、社会</p>			

科観の変化を捉える分析枠組みとして「社会科観のステイタスモデル」を、また授業構成力の成長を捉える分析枠組みとして「授業プランの分析観点」を採用し、6人の学生の学習状況を分析した。その結果、以下の傾向が明らかになった。

1年次から2年次にかけて、学生A, B, Cの授業構成力は、程度の差はあれどもいずれも向上の傾向を示したが、社会科観の変化では質的な差異が確認できた。学生AとBは、被教育体験期に構築された教養主義的な社会科観をさらに維持・強化させる一方で、学生Cは大学内外での学びの過程で葛藤し、実用主義的な社会科観への再構築を果たした。

3年次から4年次にかけて、学生D, E, Fの授業構成力は、全体として伸び悩みを示すとともに、社会科観の変化では質的な差異が拡大するようになった。学生Dは、再構築された実用主義的な社会科観をさらに維持・強化させる一方で、学生Eは、実習後の学びと入職後の姿を考える過程で葛藤し、教養主義的な社会科観への退行を示した。学生Fは、学校教育一般や子どもへの関心が高まり、社会科観そのものに対する関心を消失させた。

終章では、本研究の結論とX大学のカリキュラム改革に対する示唆を示した。具体的には、社会科観の再構築と授業構成力の向上で顕著な変容を示した学生は、4年間の過程で、問題意識を内発させる①私的心理的危機、②知的認知的危機、③臨床的経験的危機、④学術的研究的危機を経験していたこと、とくに①私的心理的危機に直面しないと、潤滑には他の危機に移行し難いこと、ゆえに、X大学の社会科教員養成カリキュラムは、これらの危機を意図的計画的に学生に経験させる機会を提供すべきことを提案した、

本論文は、以下の点で高く評価できる。

- (1) 大学4年間を通した社会科教員志望学生の成長過程を実証的に解明したこと。とくに学生の *rationale development* に着目し、大学の教育力の可能性と限界を具体的に示したこと。
- (2) 社会科観の変容を捉える枠組みとして「社会科観のステイタスモデル」を、授業構成力の向上を捉える指標として「授業プランの分析観点」を、それぞれ構築したこと。これらを活用して、社会科教員志望学生の成長を捉える方法論を確立したこと。
- (3) いわゆる *washed out* の現象が、入職前の教員養成課程段階の学生にも生じることが解明したこと。社会科教員志望学生の社会科観は、入学前後から継続的に危機に直面しない限り、再構築され難く、また被教育体験で構築された社会科観の作用で容易に揺れ戻されることを解明したこと。
- (4) 一方で、*washed out* の現象を起こさず、社会科観や授業構成力を成長させている学生の事例とその過程を詳述できたこと。大学を拠点にして社会科教員養成をすることの意味や可能性を示唆したこと。
- (5) 意図・実施・達成されたカリキュラムのエビデンスに基づいて、X大学の社会科教員養成カリキュラムの課題を指摘し、改善案を提起できたこと。すなわち、本研究の方法論がカリキュラム改善に資する有用性と汎用性を示したこと。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

平成29年2月14日

